

## 巻 頭 言

平成 26 年 9 月に地方創生担当大臣が創設されました。以来、日本中で“地方創生”が注目され、本学のような県立大学にも“地方創生”への貢献が求められていると感じる日々が続いています。平成 26 年 11 月には、まち・ひと・しごと創生法が成立しました。少子高齢化の進展への的確な対応、夢や希望を持ち、潤いのある豊かな生活を安心して営むことができる地域社会の形成、地域社会を担う個性豊かで多様な人材の確保等の内容を計画的に実施することがうたわれています。

これらの急激な社会の動きに出会い、あらためて本地域ケア総合センターのこれまでの活動や実績を思い起こさずにはいられません。15 年前からまさに“地方創生”を念頭にこのセンターがあったのです。能登半島の入り口に存在する大学に附置されたセンターとして、地元やそれよりも不便な地域で、まちを知り、まちと協働で活動を作り、ひとを育てることを行ってきました。人は、好きなふるさとで暮らせることが何よりの安心とつながると考えてのことです。学生もそこで学ぶことによって地域（そこがどんな辺鄙な場所であろうとも）で暮らすことの意義を知り、いつかそれを支える看護職になってくれるものと期待も込めています。

具体的には、本学ではかほく市を始めとして、特定の市町あるいはその中の小さな地区とタイアップした教員の活動が活発化しています。当然学生もその活動に参加して学びかつ貢献しています。本センターは、そのような活動の支援も開始しました。能登にある大学、奥能登に最も近い大学としてしばらくこの方向性を維持してゆきたいと考えております。

このように、地域ケア総合センターは、本学の理念を体現する重要な組織として開学時から全学を上げて充実させてまいりました。ここから生まれたいくつかの活動は、すでに地域に定着しております。さらに、たくさんのシーズともなりうる活動が展開されています。

さらに本センターは近年、国際交流にも継続的に力を入れ、JICA 北陸に協力すると同時に、教職員・学生のグローバルな視野の広がりにも役立てています。こちらも今後には渡って力を注ぎたいと考えております。

どうぞこの報告書で平成 26 年度にどのような活動があったかをご覧ください、忌憚のないご意見をうかがえれば幸甚に存じます。

石川県公立大学法人 石川県立看護大学  
学長 石垣和子

## 地域ケア総合センター「事業報告書（第12巻）」発刊に寄せて

石川県立看護大学では、地域ケア総合センターの年次活動報告書（事業報告書）を刊行してまいりました。本年も、運営委員会ならびに地域ケア総合センターの活動にご協力いただいた教職員と地域のみなさまの多彩な活動をまとめ、ここに第12巻を発刊する運びとなりました。

平成26年度は、昨年度に引き続き「人材育成」、「地域連携・貢献」、「国際貢献」の3本柱で地域に密着した活動を推進してまいりました。

専門職研修として開催した「て・あーて「手を用いたケアの力」」では、看護における手を用いたケアの教育・実践を目的に行われ85名の方が参加者してくださいました。

生涯学習講座「死生観とケア」では、高齢者ケア、終末期ケアのあり方について理解を深めることを目的に、ケルスティン・ラマー教授による招聘講演と門林研究員による公開研究会を開催いたしました。2回で約280名という多くの方にご参加いただきました。

地域貢献事業では、公開フォーラム「子育てしやすい街づくり（仮題）」として、かほく市子育て支援課との共同開催を予定しています。

国際貢献事業のうち、パラグアイ日系研修「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」では、3名の研修員を迎えました。学内で高齢者福祉制度や日本の伝統文化、ケアシステム、介護に関する知識や技術を学ぶだけでなく、羽咋市社会福祉協議会にご協力いただき、病院や施設における実践的な実習も行わせていただきました。

地域のみなさまにおかれましては、是非とも本冊子をご高覧いただき、本学地域ケア総合センターへのご理解を深めていただき、引き続きご指導、ご助言を賜れば幸甚に存じます。

地域ケア総合センター長 長谷川 昇

# 目 次

(ページ)

1	人材育成事業	
1-1	専門職研修	
1-1-1	て・あて「手を用いたケアの力」	1
1-1-2	訪問看護技術の基本手技	2
1-2	本学教員主催の研究会・事例検討会	
1-2-1	ジェネラリストのための事例検討	3
1-2-2	ペリネイタル・グリーフケア検討会	5
1-2-3	子育て支援・虐待予防に関する勉強会（事例検討会）	7
1-2-4	高齢者ケア研究事例検討会	8
1-2-5	がん看護事例検討会（北陸高度がんプロチーム養成基盤形成プラン）	9
1-3	相談サービス事業	
1-3-1	各種研修会等への講師派遣事業	10
1-3-2	病院への事例・活動・研究等の指導助言実施状況（再掲）	12
2	地域連携・貢献事業	
2-1	地域連携事業	
2-1-1	来人喜人（きとくと）里創りプロジェクト事業	13
2-1-2	健康応援倶楽部・健康増進モデル事業	14
2-1-3	棚田が織りなす食・緑・健康の郷づくり	15
2-1-4	いきいき美人大学校	16
2-2	生涯学習講座	
2-2-1	公開研究会「死生観とケア」	17
2-2-2	あかちゃんをお空にみおくれた方の自助グループに対するサポート活動	18
2-2-3	祖父母の楽しい上手な孫育て教室	20
2-2-4	子育て だろっぶ・イン・さろん	21
2-2-5	おやこのたのしいじかん	23
2-3	ワンストップサービス事業	24
3	国際貢献事業	
3-1	JICA 日系研修「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」	25
4	その他	
4-1	かほく市との包括的連携協定に基づく事業	27
4-2	石川県立看護大学公開フォーラム	29



# 1 人材育成事業

# 1 人材育成

## 1-1 専門職研修

### 1-1-1 て・あて「手を用いた看護ケアの力」

#### 1. 事業の目的

看護における手を用いたケアの価値を見直すとともに長期臥床患者の拘縮した手指の清潔ケアの方法を、手浴ベースンの開発・製品化の実践例等を通して学ぶ。また、患者・看護職のニーズと企業のシーズから看護用具の開発の発信について考える。

#### 2. 実施状況

	開催日時	テーマ・講師	参加人数・施設数
第1回	H26. 8. 9(土) 13:30-16:30 (定員 100名)	第1部 手を用いた看護ケアの価値 川嶋みどり 日本赤十字看護大学名誉教授 第2部 長期臥床患者の拘縮手の清潔ケア 中田 弘子 石川県立看護大学	106名 (看護・介護職 99名、教員 1名、学生 6名) 56施設 (医療施設 25、介護施設 29、訪問看護ステーション 1、教育機関 1)
第2回	H26. 9. 21(日) 13:30-16:00	人間工学からみた看護デザイン 小林 宏光 石川県立看護大学	31名(看護・介護職 31名) 17施設(医療施設 9、介護施設 7、訪問看護ステーション 1)

#### 3) 実施内容

第1回「手を用いた看護ケアの力」の第1部は、川島みどり日本赤十字看護大学名誉教授による講義がなされた。主な内容は、近年の高度医療において患者に触れなくなった看護への危惧と看護の原点である看護師の手を用いたケアの有用性、TE-ARTE 学の紹介であった。第2部は、長期臥床患者の拘縮手の清潔ケアの研究成果を紹介し、臨床における手のケアの提案を行った。後半は、手浴ベースン開発のプロセスと製品の有用性を紹介するとともに、参加者同士による手浴ベースンを用いた手浴体験とディスカッションを行った。参加した 55 施設に対し、手浴ベースンのプロモーションを目的として、1 施設につき 1 個の手浴ベースンと製品としてのアンケートを配布した。

第2回「人間工学からみた看護デザイン」では、改善 (KAIZEN) の意義とプロセス、問題の発見と解決のコツについてこれまでの看護用具・機器などの開発例を紹介しながら講義を行った。

#### 4) 評価と今後の課題

本研修の参加施設は、介護保険施設と医療施設が半々であり、医療施設では小～中規模病院からの参加が大半であった。療養型病棟および介護保険施設では、脳血管障害による長期臥床患者・入所者の割合が多いことから、本研修参加への動機に繋がったものと思われる。また、手浴体験では看護・介護職間において日頃のケア方法や問題についての情報交換がなされた。後日、18 施設から製品に関するアンケートの回答があり、従来の洗面器と比較し、使いやすさ、安定性、安楽性、簡便性、デザイン性等について概ね良好な評価が得られた。

今後は手を用いたケアの価値を見直すとともに、臨床からの問題提起やディスカッションの時間を充実させる必要があると考える。また、手浴ベースンのプロモーションの機会として本研修を継続していく。

## 1-1-2 「訪問看護技術の基本手技」-もう一度、ご自身の手技を確認してみませんか？-

### 1. 事業の目的

在宅現場で働く訪問看護師は、広範囲の看護技術が求められる。また、訪問看護師は単独訪問であるため、自身の訪問看護技術の再確認の場や機会が少ない。訪問看護技術の中でも再トレーニングの要望が高い基本手技について学ぶことで、訪問看護師の訪問看護技術の向上を図ることを目的とした。

### 2. 実施状況

平成 26 年 9 月 6 日(土)13:30-16:30、

石川県立看護大学 基礎看護学実習室

第 1 部：テーマ「皮膚・創傷ケアに関する最新情報」

講師：木下 幸子先生、金沢医科大学 看護学部 成人看護学 講師（皮膚・排泄ケア認定看護師）

第 2 部：テーマ「訪問看護技術の基本手技」の再トレーニング〔演習〕

1. 「経尿道的膀胱留置カテーテル」担当：林一美(本学 在宅看護学講座)

2. 「在宅 CV ポート穿刺」担当：井上智可(本学 在宅看護学講座)

3. 「在宅点滴静脈注射」担当：中嶋知世(本学 基礎看護学講座)

参加者：訪問看護師 26 名

### 3. 実施内容

第 1 部は、木下 幸子先生、金沢医科大学 看護学部 成人看護学講師（皮膚・排泄ケア認定看護師）による「皮膚・創傷ケアに関する最新情報」の講義と演習がおこなわれた。講義は、皮膚の構造、皮膚の保湿や保護の必要性、最新のスキンケア等についてであった。演習は、最新の絆創膏の貼り方やはがし方、スキンケアの方法等を演習した。

第 2 部は、モデルを用いた「経尿道的膀胱留置カテーテル」、「在宅 CV ポート穿刺」、「在宅点滴静脈注射」の 3 演習を 3 つのブースに設置し、全員がローテイトして演習した。参加者の中には、今回の看護技術については未経験者もいた。また、やり慣れた看護技術であっても看護技術の手技の再確認をしたり、利用者に合わせたやり方を参加者同士で確認しあったりした。

最後に意見交換と参加者アンケートして終了した。

### 4 評価と今後の課題

アンケートの結果は、参加者の訪問看護歴は 1 年未満 3 名、1-5 年 8 名、6-10 年 6 名、11-15 年 5 名、16 年以上 1 名、不明 3 名と、1-5 年が最も多かった。講座に対する満足度は、とても満足 16 人 (64%)、満足 7 名 (28%)、おおよそ満足 2 名 (8%)であった。意見や感想では、「とても楽しかった」「自分の手技の振り返りになった」「実技が出来てよかった」「実技実習の研修は少ないのでとてもよく充実していた」等があった。訪問看護師は、最新モデルや利用者が用いる医療機器の取り扱い等に関し業者から学ぶことが多い。この度のように、「訪問看護技術の基本手技」を看護師同士で互いに学びあう機会や場は少なく、看護技術の学習ニーズが高いとわかった。本学実習室は、モデル等を多く備え充実している。今後は県内の訪問看護師らが、本学実習室を有効活用しながら看護技術の向上を図れるような本研修の継続がもとめられている。

## 1-2 本学教員主催の研究会・事例検討会

### 1-2-1 看護実践力向上セミナー ジェネラリストのための事例検討

実施目的：

本研修会の目的は、日々の看護実践の中で自分のかかわりが良かったのか、もっとできることがあるのではないかと疑問を抱いている看護職を対象に、「看護とは」に照らしながら事例検討を行い、ジェネラリストとして確かなアセスメント能力を培い、実践力向上をめざすことである。

事例検討の目標：

事例検討の目標は、事例提供者である看護師が自己の看護実践をふり返り、看護が実施できたのか、より良い看護実践につなげるにはどうしたら良いのか等、自己評価を実施できることである。

実施内容：

1. 対象者：県内の医療施設等に勤務している臨床看護師、看護教員、学生

2. 開催日ならびに内容：

1回目 平成26年7月27日(日)13:30～16:00 地域ケア総合センター研修室

テーマ 自己の看護実践、教育実践を振り返る①

チューター 中田弘子、川島和代、藤田三恵 他

2回目 平成26年11月29日(土)13:30～16:00 地域ケア総合センター研修室

テーマ 自己の看護実践、教育実践を振り返る②

チューター 川島和代、中田弘子、藤田三恵 他

3. 事例検討会の進め方：

3年目を迎えた本事例検討会では、参加者から提供された事例を用いて事例検討を行った。事例検討は、グループ討議を中心とし、進行は各グループを担当するチューターが担った。自由な発言を大切にしながら、一方で、参加者の看護実践経験や生活体験と重なると、患者像が豊かになり、患者の位置から考えやすくなる。チューターは参加者が持っている知識やさまざまな体験が共有できる発言を促すよう努めた。

本学教員が講師としてまとめを行い、「看護とは」に照らしながら対象の特徴と看護の方向性を示すことで自己の看護実践を自己評価できる手助けを行っている。

事例検討の素材となる事例は、事例提供者ならびに施設の許可のもと使用した。当該事例の個人情報は個人が特定されないよう必要最小限の事実を精選した。また、終了後は事例の情報が記載された資料は回収し、終了時に参加者のアンケートを実施した。

4. 事例検討会の実際：

回	日時・場所	検討事例とその結果	参加人数
1	平成26年7月27日(日)13:30～16:00	【事例：A氏 50歳前半女性、末期癌（転移あり）。未成年の子との2人暮らし、化学療法を実施後、自宅療養を続けていたが、疼痛が強く日常生活が困難になり入院となった。患者は麻薬の使用に抵抗感があり、増量に不安があった。麻薬の使用について、看護師に繰り返し確認し、看護師の対応によって混乱する様子がみられた。骨転移による脊髄の神経障害により下肢痛が出現、内服にてコントロールしている。どのように看護を行えば良かったの	36名



		<p>かふり返りたい。】</p> <p>事例検討では、看護師は、A氏に疼痛増強時には我慢せず、薬剤を使用して良いことを説明したが、説明内容によってA氏が混乱する場面もみられた。そこで、使用薬剤と使用量の適切さについてA氏が納得できるよう専門家（薬剤師）の説明の機会を設定した。A氏が、レスキューを希望した場合は、A氏自身が疼痛の程度の自己評価ができていたことがわかりA氏の判断を尊重した。麻薬の増量に対して理解が得られ、疼痛を軽減することができ、表情も穏やかになった。また、精神的に不安定なときは、薬剤のみに頼らず、そばにいて、話を聞き、リラックスできるケアを実施し、気分転換を促した。病態は徐々に悪化傾向であるが、受け入れようとされ、今の自分ができることは何かを考え実行されている。このような状況を作り出した看護師のかかわりは看護になっていると自己評価できた。</p>	
2	<p>平成 26 年 11 月 29 日 (土) 13:30～ 16:00</p>	<p>【事例：B氏 80歳代女性、C型肝炎、肝硬変、障害のある子の世話を長年担ってきた。食欲低下、低栄養、肝性脳症を認め入院した。本人は退院を希望し、ベッドからの転倒を繰り返す。家族や医療者は自宅へ帰ることは困難と考えている。どのようなケースか、また、どのように整えればよいか検討したい】</p> <p>事例検討では、B氏の状況をグループ毎に捉えなおしをし、発表を通して共有した。B氏の対象特性を次のように捉えた。</p> <p>「加齢と長年の肝炎ウィルスと闘いに敗れて肝臓の働きが不可逆なところまで追い込まれたため健康な細胞の作り替えが妨げられ生命力の幅が小さくなっている。積極的な治療は困難な状況ではあるが、これ以上肝臓に負担をかけないよう良質な栄養の摂取、出来るだけ有害物質を取り込まないようにする。日々の生活が安楽に過ごせるよう家族や社会資源を活用してこの方と家族の生活を支援することができれば、その人らしく生活できる老年期の女性」対象特性が捉えなおせ、B氏のからだに生じている変化を踏まえながら、退院に向けて本人と家族との考えの違いを調和的に解決する方向性が見えてきた。事例提供者がこのように考えれば関わっていけると思考が発展した。</p>	38名

#### 5. 今後の課題：

事例検討は、自分の関わっている事例を自らの頭脳でふり返ることが重要であると考え。全体像を押さえながらも、対象の身体に起こっている変化の事実をフィジカルアセスメントする力が重要と考える。そこで、看護師がアセスメントしている内容をどのように患者や家族に伝え、考えていただけるのか、看護師の表現力も問われると考える。身体内部を可視化できる教材は有用であったと考える。参加者も病態の捉えを学びなおせたことが良かったと述べている。

患者の置かれた状況が相手の位置から捉えなおせると、事例提供者の中に『あっ、そうか』という表情の変化が認められ、安定した感情に変化していくことが読み取れる。

この事例検討会での学びが定着し、看護実践に自在に活用できるまで継続参加をしていただけるよう魅力的な運営が引き続きの課題である。次年度以降も継続したいと考えている。

## 1-2-2 ペリネイタル・グリーフケア検討会～周産期の死のケアの充実をはかるために～

**事業の目的：** 県内の周産期の死に関わっている看護職がケアの現状を話し合い、互いに情報交換したり、体験者の思いを聞いたり、教員等からの新しい情報を得ることによって、臨床での周産期のケアの充実をはかる。

**目 標：** 第 11 回：「他の地域のグリーフケアの現状から学ぼう ～宮崎県編～」：他の地域のグリーフケアの現状を知ること、自分たちのケアに活かすことができることはないか考えることができる。  
第 12 回：「地域連携モデル案について意見を出し合おう」：退院後の地域での効果的グリーフケアの連携のあり方について考えることができる。

### 実施状況：

**開催日時：** 第 11 回：H26. 7. 8 (火) 13:30～16:00

第 12 回：H27. 2. 10 (火) 13:30～16:00

**実施場所：** 石川県立中央病院 健康教育館 2F 大研修室

**講 師：** 米田昌代、吉田和枝、曾山小織

協力：桶作梢、工藤淳子（石川県立中央病院）水口真里（金沢医科大学病院）

河村淳子（まなぶクリニック）、森田智恵（金沢大学附属病院）

北濱まさみ（富山福祉短期大学）

**参加者：** 第 11 回：15 名（産科・NICU に勤務する助産師・看護師 13 名 院生等 2 名 内企画委員 6 名）

第 12 回：12 名（産科・NICU に勤務する助産師・看護師 11 名 保健師 1 名 内企画委員 5 名）

### 実施内容：

第 11 回：「他の地域のグリーフケアの現状から学ぼう ～宮崎県編～」

始めに米田より、前回(第 10 回)のロールプレイの振り返り、体験者からのケアに対する要望に関するメッセージを伝えた。また、ハートシェアの会(福井)が新たに加わった自助グループのちらしを説明し、配布した。引き続き、日総研セミナーで活躍している本会企画委員で富山福祉短期大学の北濱氏より「赤ちゃんへのエンゼルメイク」参加者のアンケートの結果報告をしていただいた。その後、ペリネイタルホスピスの動画と第 7 回東アジアグリーフケアセミナー(宮崎)「周産期の喪失を考える」のシンポジウム「周産期喪失のケア～家族中心のよいケアとは何か?」の DVD を上映した。宮崎県のグリーフケアの現状と宮崎県の自助グループの活動についてシンポジストより情報提供があり、その後関係者間で退院後のグリーフケアの連携をどうとっていくか、自助グループをいかに支えていくかというディスカッションの場面を視聴した。視聴後、グループに分かれて(5 人×3 グループ)、DVD をみての感想、今後活かそうなことを話しあうとともに、各自の近況報告と情報交換の時間をもった。

第 12 回：「地域連携モデル案について意見を出し合おう」

始めに前回(第 11 回)の DVD 鑑賞の感想、グループワークのまとめの振り返り、セミナー報告を実施し、18 トリソミー写真展の協力と参加のお願いをした。

本日のテーマに入る前に、近況報告・情報交換タイムとして、各グループ毎に自己紹介とともに、近況を話し、現在抱えている事例等で困りごとがあれば出し合い、意見をもらったり、各施設からの情報提供からヒントを得る時間を設けた。

本日のテーマとしては、米田が研究で作成している退院後のグリーフケアの地域連携モデル案をもとに、自分たちの施設でできること 現在やっていること、今後提案していきたいこと 実現に困難を要すると考えられること、困難を打破するための方略、他の関係施設・関係者への希望等意見を出し合った。

## 評価と今後の課題：

### 第11回：「他の地域のグリーフケアの現状から学ぼう ～宮崎県編～」

昨年度第9回の評価として、県外のモデルとなるような病院と情報交換できるような工夫が必要という点が挙がっていたが、今回、来ていただくということは距離的にも予算的にも難しいため、宮崎での東アジアグリーフケアセミナーの様子を上映することとした(主催者よりセミナー参加者が各地域で活用できるようにという趣旨で発行されたもの)。参加者の感想としては、「他県の様子や体験者の生の声が聞けてよかった」「自助グループを支える体制が必要であるということがわかった」「グリーフケアは地域差が大きいので、もっと医療者側の取り組みを広げていけるとよい」等が挙がっていた。今後はやはり、直接県外のモデルになるような病院や地域と情報交換できるような場の企画が必要であると考え、今後予算を提示していきたいと考える。

### 第12回：「地域連携モデル案について意見を出し合おう」

参加者の感想としては「地域連携について勉強になった」「地域との話し合いで相互理解ができた」「医療機関が今後目指すところが見えてきた」等地域連携に対する意識が高まったようであった。しかし、保健師の方の参加は1名のみであり、今後、行政サイドの参加者も募り、より一層連携について話し合える場を設定していきたいと考える。セミナー報告に関しては、今回は資料をつけたことによって、わかりやすい、勉強になったという感想もみられたので、今後も資料等の工夫し、続けていきたいと考える。

### 全体：

どちらの企画も協力者である企画委員の意見により、企画が決定され、グループワークの進行、まとめの記録等積極的に関わってくださっている。今後も企画委員を中心として臨床のニーズに即した内容で企画していきたいと考える。参加人数は減少傾向にあるので、より一層臨床のニーズを吸い上げていきたい。

実施後のアンケート結果からは広報、配布資料、会場、開催時期、内容、方法、時間すべてにおいて、全員が「満足」か「ほぼ満足」に回答しており、参加者の満足度は高いと考えている。しかし、参加者のケア経験度にばらつきがあるため、今後企画委員中心の継続的活動とグリーフケアを広めるための活動に分けて、企画委員にとっても満足度の高いものになるように工夫していく必要があると考えている。

## 1-2-3 子育て支援・虐待予防に関する勉強会（事例検討会）

### 事例検討会の目的

地域や医療現場での子育て支援や虐待予防に関するケア経験を共有し、よりよい関わりに向けて研鑽する。

### 実施状況

**参加者：**子育て支援・虐待予防に興味がある看護師、助産師、本学大学院修了生、大学院生、母性・小児看護学教員

**開催場所：**石川県立看護大学 教育研究棟 3階会議室

### 開催概要

回数	開催期日 時間	テーマ	事例提供者	参加人数
1	平成 26 年 7 月 8 日 (火) 19:00～20:30	①排泄行動が確立していない学童期のこどもへのケア ②オペキッズアドベンチャー導入後の職場文化の変化	小児看護 専門看護師	13人
2	9 月 9 日 (火) 19:00～20:30	重症心身障がい児の在宅移行支援について ～母親が精神疾患を患っている事例～	小児看護 専門看護師	11人
3	10 月 8 日 (水) 19:00～20:30	チック症状が増加し悪循環に陥った児の支援 -トウレット症候群の思春期男児の事例-	小児看護 専門看護師	16人
4	11 月 12 日 (水) 19:00～20:30	妊娠 30 週まで未受診の妊婦とその児の支援	小児救急看護 認定看護師	11人
5	12 月 3 日 (水) 19:00～20:30	SBS (シェークンベビーシンドローム) と診断された品胎第一子への支援を経験して	小児救急看護 認定看護師	13人
6	平成 27 年 2 月 3 日 (火) 19:00～20:30	難聴をもつ児の、うつ傾向のある母親への支援	言語聴覚士	14人

### 事例検討会の成果・評価と今後の課題

今年度は、小児看護専門看護師だけでなく、小児救急認定看護師や言語聴覚士からも事例を提示いただき、多職種による事例検討ができた。参加者全体で、子どもと家族へのかかわり方を検討・共有できる充実した時間となった。

多職種により広く意見交換ができたことで、参加者それぞれの子育て支援・虐待予防の支援に対する新たな視点を得られていたことが、参加者の感想よりうかがえた。

次年度も様々な領域、事例から検討会を実施し、子育て支援・虐待予防の支援の充実を目指す。

## 1-2-4 高齢者ケア事例検討会

### 1. 事例検討会の趣旨

県内の高齢者ケアの質の向上を高めるために、ケアの専門家としての実践能力を育成・向上する継続的な学習の場とする。また、実践と教育・研究の連携の場としての有用性をはかる。

### 2. 資料の取り扱いについて

- \* 個人のプライバシーを侵害しない
- \* 個人の責任において資料を安全に保管する。不要になった時は、シュレッダー処理する。
- \* 資料を他に活用する場合は、事例提供者の了解を得る。
- \* 資料に関しては、個人が倫理的な責任を負う。

### 3. 実施状況

回	月 日	テーマ	参加人数
第 94 回	平成 26 年 5 月 14 日 (水)	「心不全を繰り返す高齢者との関わり」	24 名
第 95 回	6 月 11 日 (水)	「脱水によるせん妄状態で入院した高齢者に、退院を意識した調整で学んだこと」	16 名
第 96 回	7 月 16 日 (水)	「治療やケアを拒否する認知症高齢者への関わり」	10 名
第 97 回	9 月 10 日 (水)	「誤嚥性肺炎を再発した認知症高齢者への食事支援について」	12 名
第 98 回	10 月 8 日 (水)	「認知症をもつ高齢糖尿病患者のセルフケアに対する認識」	12 名
第 99 回	11 月 12 日 (水)	「認知症高齢女性の大腿骨頸部骨折術後の関わりからの学び」	13 名
第 100 回	平成 27 年 2 月 10 日 (火)	「糖尿病性腎症により透析導入後 2 か月の A 氏が自分の身体に目を向け、食の自己管理ができ、少しでも長く療養生活を送れるための看護の検討」	13 名
第 101 回	3 月 12 日 (水)	「食事、介入拒否をするレビー小体型認知症の A さんの関わりについて」	13 名

参加者：看護師対象（石川県内の高齢者ケアに関わる看護師、本学大学院生修了生、大学院生、在学生、老年看護学教員、施設管理者）

### 4. 事例検討会参加者の評価（アンケートより一部抜粋）

- \* 事例に似た症状や言動のある患者に対して対応方法、アセスメント、視点を広げることが出来た。
- \* 自身の実践と言うわけでないが、実習で学生の担当する事例をみると視野が広がる。
- \* 自分では気付けなかった考えがもらえる。
- \* すべての事例の振り返りが出来た。
- \* 業務に関わっている事例を考えていくうえでいろいろな視点、視座が得られた。
- \* 実習での学生の場面でも似たようなことがあり、振り返りながら考えることが出来た。

### 5. 事例検討会の成果

現場から実際の事例を提供していただき、臨床・大学双方にとっての学びの場となっている。検討会での意見を臨床に持ち帰り、スタッフと共有することで臨床看護の質の向上につながっている。さらに、看護学生の参加もあり老年看護の学びを実践に活用する実際についても学ぶ機会となっている。参加者は、CNS、認知症認定看護師といった専門家や、施設管理者、病棟師長など管理職がおり多施設、多職種間での情報交換ができた。また実践と教育・研究の連携の場としてディスカッションが深まり、よい刺激となっている。そして、CNS 過程の院生からの事例提供もありケアの専門家としての実践能力を育成・向上する継続的な学習の場となっている。参加者のアンケート結果では、回答者全員が継続を希望されていることから、継続的な学習の場になっていると考えられる。

# 1-2-5 がん看護事例検討会

## 1. 事例検討会の趣旨

がん看護の質の向上を図るため、がん看護専門看護師と共に、日々のがん患者様やそのご家族への看護実践の中で遭遇する困難事例について、施設の垣根を越えて意見交換を行うことを通して、北陸3県のがん看護の質の向上を図るケアの専門家としての実践力を育英・向上する場とする。

## 2. 資料の取り扱いについて

- \* 事例検討会中の撮影・録音は行わない。
- \* 参加者は、話し合われた内容について不用意に他言せず、施設や個人の情報を保護する。
- \* 日本看護協会の倫理綱領の基本姿勢を遵守する。

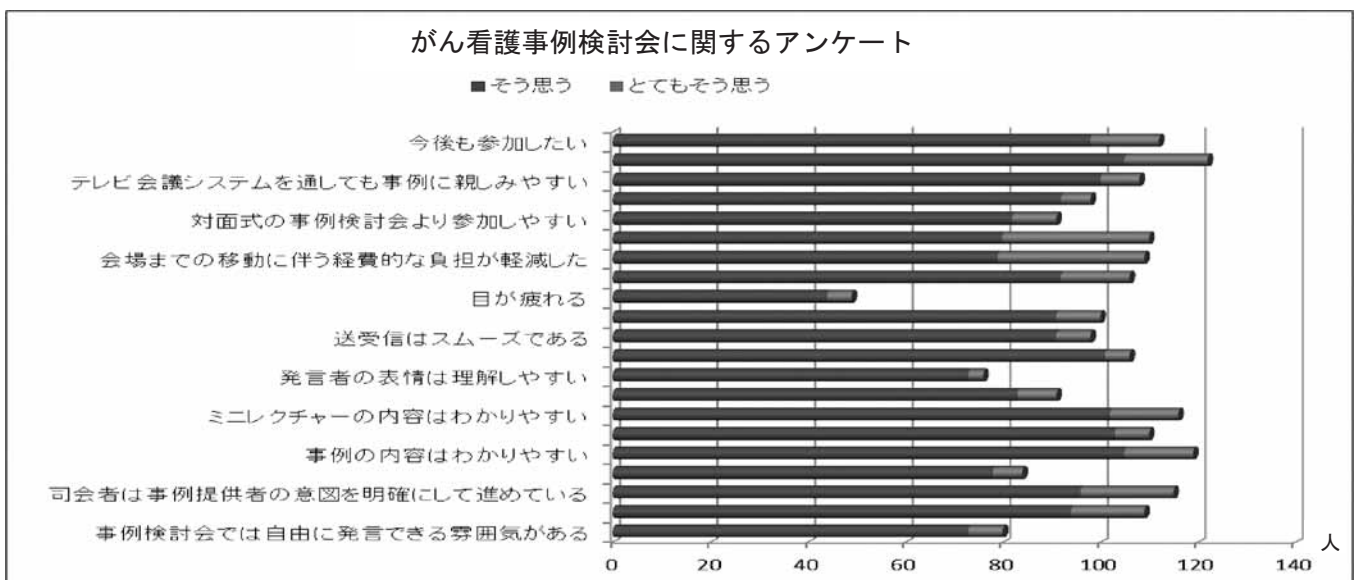
## 3. 実施状況

平成26年度は5月から計8回実施し、参加者総数は819名であった。

回	月 日	テーマ	参加施設	参加人数
第1回	26.5.13(火)	バッドニュースを伝えずに終末期を迎えた患者への関わり	11	140
第2回	26.6.10(火)	乳がん患者が自分らしく最期を迎えるための家族への支援	11	110
第3回	26.7.8(火)	終末期におけるリンパ浮腫患者の心理と看護	11	102
第4回	26.10.7(火)	口腔癌の緩和ケア ～緩和ケアチームで支えた症例を振り返る～	11	103
第5回	26.11.11(火)	家族を通して患者のエンド・オブ・ライフケアを支える —婦人科がん患者との関わりから—	10	82
第6回	26.12.2(火)	膵がん患者と妻をささえた在宅看取り —早期からの緩和ケアの介入—	10	76
第7回	27.2.10(火)	早期退院を望む術後患者への関わり	11	92
第8回	27.3.3(火)	看取りに向けた環境調整が困難だった事例	11	114

参加施設：(5大学+15病院) 金沢大学・富山大学・福井大学・金沢医科大学・石川県立看護大学・小松市民病院・金沢赤十字病院・公立能登総合病院・恵寿総合病院・石川県済生会金沢病院・金沢医療センター・金沢市立病院・富山県立中央病院・富山市民病院・高岡市民病院・市立砺波総合病院・富山赤十字病院・富山県済生会富山病院・富山県済生会高岡病院・福井県済生会病院

## 4. 事例検討会参加者の評価（アンケートより一部抜粋）



## 5. 事例検討会の成果

がん看護事例検討会は北陸3県の18病院をテレビ会議で繋ぎ、遠隔地からも参加できることが大きな特徴である。内容は「がん看護事例検討会」(60分)とがん看護専門看護師による「ミニレクチャー」(20分)で成り立ち、教員や大学院生、がん看護専門看護師が参加し、意見交換されている。北陸の冬は雪のため一つの施設に集まり事例検討を実施することが困難である。テレビ会議システムの利用により、がん看護専門看護師がいない施設でも、近隣の施設に移動するだけで他施設ともタイムリーに意見交換することが可能になった。これにより学習上の問題の克服や過疎地域の臨床看護の質の向上にも繋がっている。

# 1-3 相談サービス事業

## 1-3-1 各種研修会等への講師派遣事業

分野別派遣回数

番号	1	2	3	4	5	6	
種類	病院等	職能団体(看護協会等)	行政	学校・教育機関	福祉・高齢者関係の任意団体	その他	計
回数	19	0	2	1	1	1	24

No.	派遣講師	派遣日時	派遣場所	内容	主催者	種類
1	教授 牧野 智恵	H26.7.26 14:50 ~ 16:20	しいのき迎賓館	学都石川の才知「末期における『生きる意味』」	大学コンソーシアム石川	6
2	講師 中道 淳子	H26.6.10 10:30 ~ 12:00	かほく市七塚健康福祉センター	講演「認知症予防のできるまちづくり」	かほく市身体障害者部会	5
3	准教授 彦 聖美	H26.7.25 14:00 ~ 17:00 H26.11.27 14:00 ~ 17:00 H27.2.26 17:30 ~ 19:30	公立つるぎ病院	看護研究指導・講評	公立つるぎ病院	1 1 1
4	准教授 彦 聖美	H26.9.13 13:00 ~ 15:00	鶴来総合文化会館クレイン	第8回看護実践学会学術集会シンポジウムのコーディネーター	公立つるぎ病院	1
5	講師 木森 佳子 助教 森田 聖子	H26.6.27 14:00 ~ 17:00	公立能登総合病院	看護研究の指導等	公立能登総合病院	1
6	教授 今井 美和	H26.6.18 12:55 ~ 14:35	七尾高等学校	学校設定科目「フロンティアサイエンス I」の講義及び実習	七尾高等学校	4
7	教授 川島 和代	H26.7.27 9:00 ~ 9:30	キャッスル真名井(鳳珠郡穴水町)	在宅医療における基礎看護について	公立穴水総合病院	1
8	助教 子吉 知恵美	H26.9.11 H26.9.25	流杉病院(富山市流杉)	高齢者に対する看護・介護理論(仮)	流杉病院	1 1
9	教授 川島 和代 講師 中道 淳子	H26.7.31 H26.8月下旬 H26.9月下旬 19:30 ~ 20:30 H26.8.6 H26.8.21 H26.9.10 13:30 ~ 15:30 H26.10.1	内灘町役場 向陽台公民館 緑台公民館	平成26年度認知症高齢者見守り訓練(勉強会、実行委員会及び当日)	内灘町地域包括支援センター	3
10	教授 西村 真実子 講師 米田 昌代	H26.8.22 H26.8.29 H26.9.5 H26.9.12 H26.9.19 H26.9.26 10:00 ~ 12:00	小松市すこやかセンター	平成26年度「自分らしい子育て講座」	小松市いきいき健康課	3

No.	派遣講師	派遣日時	派遣場所	内容	主催者	種類
11	講師 中田 弘子	H26.10月	羽咋病院	事例検討会	公立羽咋病院	1
		H26.12月				1
		H27.2月				1
12	准教授 彦 聖美	H26.10.22	芳珠記念病院	看護研究指導	芳珠記念病院	1
13	教授 浅見 洋	H27.2.3 17:30 ~ 18:30	石川県立中央病院	医療安全研修会講師「医療安全と感染対策における倫理について」	石川県立中央病院	1
14	教授 浅見 洋	H26.11.14 17:30 ~ 19:00	公立松任中央病院	研修会講師「倫理原則の臨床現場での使い方」	公立松任中央病院	1
15	臨時講師 小清水 明子	H26.12.11 16:00 ~ 17:15	恵寿記念病院	研修会講師「伝える力を高める」	恵寿記念病院	1
16	臨時講師 小清水 明子	H26.11.28 17:30 ~ 18:30	北陸中央病院(小矢部市)	研修会講師「伝える力を高めませんか!!」	北陸中央病院	1
17	講師 木森 佳子 助教 森田 聖子	H27.2.7 8:30 ~ 12:30	公立能登総合病院	看護研究の講評等	公立能登総合病院	1
18	准教授 彦 聖美	H27.1.14	芳珠記念病院	看護研究指導	芳珠記念病院	1
		H27.2.28				1



### 1-3-2 病院への事例・看護活動・研究等の指導助言実施状況(再掲)

地区別	派遣病院名	指導内容	講師名		回数
加賀地区	公立つるぎ病院	看護研究指導・講評	准教授	彦 聖美	4
	芳珠記念病院	看護研究講評	准教授	彦 聖美	3
	公立松任中央病院	研修会講師	教授	浅見 洋	1
金沢地区	恵寿記念病院	研修会講師	臨時講師	小清水 明子	1
	石川県立中央病院	研修会講師	教授	浅見 洋	1
能登地区	公立穴水総合病院	看護研究指導	教授	川島 和代	1
	公立能登総合病院	看護研究指導	助教 助教	木森 佳子 森田 聖子	2
	公立羽咋病院	事例検討会	講師	中田 弘子	3
富山県	流杉病院(富山市流杉)	看護研修	助教	子吉 知恵美	2
	北陸中央病院(小矢部市)	研修会講師	臨時講師	小清水 明子	1

## **2 地域連携・貢献事業**

## 2-1 地域連携事業

### 2-1-1 来人喜人（きときと）里創りプロジェクト事業

#### 実施目的：

能登町は産業基盤が脆弱であり、かつ就学、就職時に若者が町外に流出し、少子高齢化、過疎化が急激に進行している。2010年度の高齢化率は能登町の40.1%、2035年度予測は52.6%であり、生産年齢人口が高齢者人口を大幅に下回りつつある。それに伴って、地域住民の健康な生活を支えていた地域のシステム、伝統文化、コミュニティの絆、地域産業などが減退しつつある。そうした現状を踏まえると、能登町の最大の課題は少子高齢化と高齢者等の医療、介護である。その補完的な解決策として交流人口の拡大と健康に関わる社会的文化的な活動の強化が考えられる。本プロジェクトでは看護大学の特色を踏まえ、健康問題、特に健診率向上キャンペーンを展開すると同時に、運動と食事生活に関わる文化、社会活動において地域で活動する諸団体と連携、交流しながら住民の健康づくりをサポートする。

#### 実施状況：

##### H26

4月～12月 ロコモティブシンドローム予防事業

5月11日 「第28回猿鬼歩こう走ろう健康大会」に参加。健康キャンペーン実施。

10月25日～26日 石川県立看護大学学園祭にて「能登町健康特産品クライネメッセ」の開催。

#### 実施成果：

- ・能登町健康福祉課、健康大会事務局、能登高校地域創造学科、能登町社会福祉協議会など能登町の連携団体と協力しながらその活動を支援することができた。
- ・歩こう走ろう健康大会では、大学か学生、教職員の参加、さらに大学近辺のかほく市からの参加者も同行し、地域間交流ができた。
- ・大会での健康キャンペーンでは、学生も健康チェックに参加し、大会参加者や地元住民との交流ができた。
- ・大会に健康キャンペーンを継続して参加してきた結果、健康チェックの参加者が年々増加している。
- ・大学祭でのクライネメッセでは、能登高校の出店で能登のPR活動や、福祉施設の授産商品販売で地域福祉との交流の場となった。
- ・能登町と看護大学が連携して住民の健康を支援するネットワーク基盤ができた。
- ・看護大学の学生、教職員の能登への関心が高まった。
- ・能登町健康福祉課と共催で、ロコモティブシンドローム予防事業として、各人の体力・体組成・筋力を測定し、筋肉量に合わせた運動プログラムを提示し、筋力増強を試みた。
- ・その結果、骨格筋量、基礎代謝量の有意な増加、体力測定の数値のうち、握力、上体おこし、椅子のすわり立ちに有意な効果が認められた。

#### 今後の取組予定：

- ・引き続き住民の健康づくりに意義があると思う事業をこれまで培ってきた連携のネットワークを使って実施する。
- ・本事業とそこで育んできた枠組みを基盤として、本学が一つの目標とする「地域の健康づくりにアプローチできるグローバルな視野を持った人材を育成」（ヒューマンヘルスケア人材育成プロジェクト）に展開、発展させたい。

## 2-1-2 健康応援倶楽部・健康推進モデル事業

### 実施目的：

PC や携帯電話があれば、好きな時間に好きな場所からインターネットを經由して身体状態を入力できるシステム「毎日健康倶楽部」を構築している。このシステムによって、体組成、身体活動量、食事量を一元的に把握し、週単位での運動処方や食事指導などを継続的に行い、対象者が身体状況を入力してから、評価・アドバイスまでを短期間でフィードバックする双方向コミュニケーションが可能となっている。

本年度は、ロコモティブシンドローム予防を目的として、能登町在住の健康な成人期の男女を対象者とし、能登町健康福祉課と協働して筋肉量を増加させるための運動教室を実施し、「毎日健康倶楽部」を併用することにより、筋肉量の増加やストレス度の改善を試みた。

### 実施状況：

平成 25 年からの継続

- ・能登町健康福祉課を通じて対象者を募集

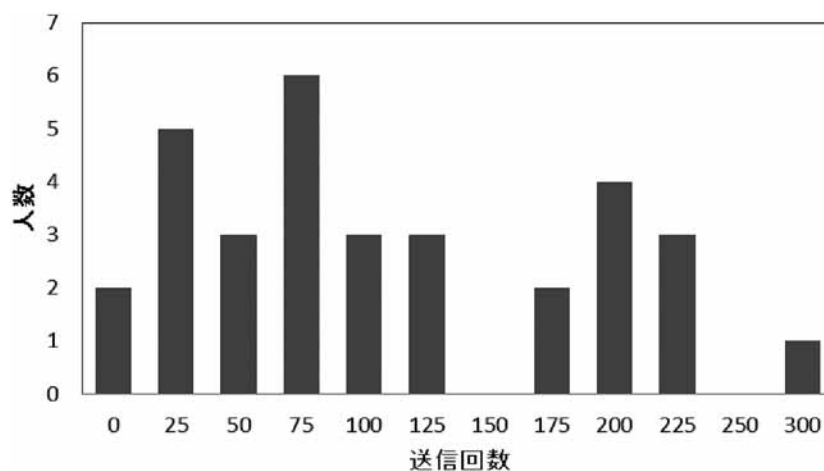
「毎日健康倶楽部」使用方法説明会、ロコモチャレンジ開始前の身体状況の把握（血圧、身長・体重・体組成の測定）、体組成計および歩数計・血圧計の貸し出し

平成 26 年 4 月

ロコモチャレンジ終了後の身体状況の把握、貸し出した機器の回収

### 実施成果：

- ・対象者 36 名の体重が減少し、骨格筋量の増加および基礎代謝量の増加が認められた。
- ・「毎日健康倶楽部」登録者：32 名  
送信回数（247 日間）：最高 268 回、最低 0 回（平均 100 回）  
1 日の歩数：平均 6,600 歩（送信回数 0 回 2 人を除く）



PC や携帯電話から身体状況を送信するシステムは、対象者が主体的にログインして行わなければならない。その結果、対象者の身体状況に対する意識が高まり、一定の効果が得られたのではないかと考える。

### 今後の取組予定：

平成 27 年度の健康応援倶楽部・健康推進モデル事業は、かほく市民の健康増進事業として展開していく予定である。

## 2-1-3 棚田が織りなす食・緑・健康の郷づくり

### I. 目的

津幡町興津地区が有する社会資源である「食」・「緑」・「健康」を有効に活用することで都市と田舎の異世代・異業種との交流の促進を図るとともに、地域の人材育成を進め、異世代・異業種の団体と連携しながら持続可能な地域をつくることであった。

### II. 具体的な内容

「興津を元気にする協議会」を再編し、住民 20 名および学生 10 名は年に 4~5 回の頻度で主体的に地域づくりの活動を継続した。

#### ① 棚田の保全と交流人口の拡大を図る「彼岸花オーナー制度」の実施

棚田の害虫駆除および景観促進を目的に、集落内外から彼岸花植栽のオーナーを募集する。夏には、住民・看護学生・オーナーが協力して棚田の斜面（畦畔）に彼岸花の球根を 5000 球ほど植栽する。秋には、彼岸花の鑑賞と、棚田で生育した米やかぼちゃへの感謝を兼ねた「ハロウィン収穫祭」を行う。「食と緑」を通して参加者の健康増進を図ると共に、オーナーには棚田でとれた新米を贈呈する。

#### ② オンリーワンかぼちゃ「興味津々」の誕生

流通業者・住民・看護学生によるかぼちゃ試食会を通して、外観の希少性やうまみを評価し、新品種へ切り替える。地区の名称と“食べてみたい興味をそそる”をもじって「興味津々」と命名し、取り扱う店を限定した「ここだけ販売」を実施する。ペースト等に加工してジェラートやプリン等のスイーツを企業と協働して開発する。

#### ③ 集落の花となる「女性会」の復活

集落の女性たちは開発中のジェラートを県内の食イベント等で販売する。また、秋の収穫祭では「興味津々」かぼちゃ、新米を使った料理をふるまい、来場者から好評を得ている。これらの活動をとおして、世帯数の減少のため途絶えていた女性会の活動を復活させようとする動きが高まり、集落の食を情報発信を担う新たなコミュニティ（「峠の会」）として活動している。

#### ④ 行政施策への提言

集落の活性化に携わる行政担当者による行政施策のワークショップにおいて、住民と看護学生は限界集落の課題を発見しその解決策を講じたという研究成果を報告する。併せて、行政がとらえている地域課題や取組に対する意見交換を行い、限界集落の活性化策を行政へ提案する機会とする。

### III. 今後の見通し

交流イベントを通じて、高齢農家のやる気・元気・活気の創出につながった。「彼岸花オーナー制度」の規模を拡大することを計画している。

## 2-1-4 いきいき美人大学校

かほく市では、「健康クラブ」と称する高齢者による健康の維持・増進を目指した自主的なグループ活動が行われている。市内3地区で週に1回定期的に活動し、会員数は250名ほどである。活動内容は、リズム体操、ストレッチ体操、ダンスなどであり、講師の指導のもと1時間ほどの活動を行っている。参加者の目的は、踊りをうまくなりたい、孫と一緒に遊べる体力を保ちたい、奉仕活動を続けられるように元気でいたい等さまざまで、好奇心や関心に基づく内発的動機づけを持ちながら楽しく活動している。

このような内発的動機づけに基づく健康意欲を後押しすることを目的に、本事業では楽しみながら自分の健康状態を知ることができる生涯学習の場を提供している。「健康クラブ」の活動を取りまとめる地元の総合型地域スポーツクラブと連携し、市内3地区から本学までバスでの送迎を行い、2009年度から毎年2回のイベントを展開している。

高齢者の健康意欲をさらにかき立てるためには、これまでに体験したことのない健康プログラムを提供することが重要となる。そのため、教員は行政や民間企業にはない学生の自由で若い発想を引き出しながら、授業や実習で得た知識やスキルを十分に生かせる健康プログラムを作成することに重点を置いている。大学にある最新の健康測定機器を使っての健診、レクリエーションゲームによる身体と頭を使う体操、工作や手芸の共同作業を通じた交流、健康教材の使い方のデモンストレーションやロールプレイ等を取り入れた健康知識の理解、学食の体験など、参加する高齢者は「一日大学生」として本学のキャンパスライフを体験できる内容となっている。

一方、学生にとっては地域住民の健康の維持・増進という社会貢献を果たすと共に、コミュニケーション能力を磨く、または授業で学んだ知識を振り返り整理することにつながっている。そのため、主体的に取り組む学生が多く、活動の内容は毎年少しずつ充実している。学生は、事前学習でイベントの内容を十分に吟味し、それを運営会議で諮り、係わる全員で知恵を出し合いながら、参加者が満足するような活動になるよう試行錯誤を重ねている。

## 2-2 生涯学習講座

### 2-2-1 公開研究会「死生観とケア」

#### 実施目的：

人間の死生を根本的に規定しているものの一つは個人、ないしはその時代、社会に特有の死生観であり、それらを勘案しながら高齢者ケア、終末期ケアがなされるべきである。本研究会では終末期ケアに関わってさまざまな活動、研究をされている方々を通して、高齢者ケア、終末期ケアのあり方について理解を深める。

これまで日本ではほとんど紹介されてこなかったドイツ語圏のゼールゾルゲの成立、展開、現状を思想的に研究し、今後のわが国の医療・福祉の臨床現場における宗教と宗教者の役割を考察することである。本研究はゼールゾルゲに関する文献を収集し、思想的な研究を行うと同時に、ゼールゾルガー（Seelsorger、魂をケアする人）であり、ゼールゾルゲに造詣の深いドイツ人研究者を日本に招聘し、スピリチュアルケアに関心のある研究者や医療者、あるいは臨床宗教師（チャプレン）の養成を試行する機関でその働きを具体的に紹介する。今回招聘した講師のケルスティン・ラマー（Kerstin Lammer）博士は、浅見訳『悲しみに寄り添う 死別と悲哀の心理学』（新教出版社、2013年）の原著者であり、ゼールゾルガーであるフライブルクプロテスタント大学教授である。

#### 実施状況：

日付	時間	場所	参加人数	テーマ	講師
4月29日 (祝・火)	14:00～ 16:00	講堂(看護大)	238名	グリーフケアの理論と実践—ドイツの病院における魂のケア(ゼールゾルゲ)—	ケラスティン・ラマー氏 (フライブルク福音主義単科大学教授)
11月8日 (土)	14:00～ 16:00	大講義室 (看護大)	44名	がん闘病記に学ぶ	門林道子氏(日本女子大学人間社会学部学術研究員)

#### 実施成果：

ドイツの有力なゼールゾルガーであり、スピリチュアルケア、グリーフケアの研究者でもあるケルスティン・ラマー教授を招聘し、これまで日本では、ほとんど紹介されてこなかったゼールゾルゲ(魂のケア)の研究、紹介、啓発を行った。また、『がん闘病記』に関して優れた著書を刊行しておられる門林研究員による公開研究会を開催した。計2回で総計約280名の参加者があった。

#### 今後の取組予定：

平成27年

5月17日(日)：イタリアにおける看取りとその文化的背景 福島智子(松本大学人間健康学部准教授)

6月28日(日)：フランスにおける看取りとその文化的背景 伊達聖伸(上智大学外国語学部准教授)

10月4日(日)：スウェーデンにおける看取りとその文化的背景 斉藤美恵(西部文理大学看護学部講師)

11月29日(日)：イギリスにおける看取りとその文化的背景 諸岡了介(島根大学教育学部准教授)

平成28年

2月7日(日)：ドイツにおける看取りの現在とその文化的背景 浅見洋(石川県立看護大学教授)

## 2-2-2 あかちゃんをお空へみ送った方の自助グループに対するサポート活動

**事業の目的：** あかちゃんを亡くした方がアクセスしやすいような体制作りとお話会を開催し、あかちゃんを亡くした方の自助グループ活動を支援する。

**目 標：** 1. お話会の運営をサポートする。  
2. 体験者、臨床、地域からの相談があった場合、4つの自助グループのネットワークを通じて対応できる。

**実施状況：**

・お話会開催 日時・場所・参加人数

対象：あかちゃん（流産・死産・新生児死亡・乳児死亡等）であかちゃんを亡くした方

回数	月日	時間	主催	場所	人数
第1回	H26. 4. 27 (日)	13:30~16:00	ひまわりの会	石川県NPO活動支援センター「あいむ」	6名
第2回	H26. 6. 2 (月)	10:00~12:00	小さな天使のママの会	津幡町役場 庁議室	6名
第3回	H26. 7. 27 (日)	13:30~16:00	ひまわりの会	石川県NPO活動支援センター「あいむ」	6名
第4回	H26. 9. 9 (火)	10:00~12:00	特別相談	ココス福久店	3名
第5回	H26. 10. 6 (月)	10:00~12:00	小さな天使のママの会	津幡町役場 庁議室	15名
第6回	H26. 10. 26 (日)	13:30~16:00	ひまわりの会	倶利伽羅塾	8名
第7回	H27. 1. 25 (日)	13:30~16:00	ひまわりの会	石川県NPO活動支援センター「あいむ」	7名
第8回	H27. 2. 2 (月)	10:00~12:00	小さな天使のママの会	津幡町役場 庁議室	14名

・適宜メール相談・電話相談・面談

・ひまわりの会 自殺予防活動 石川県主催 講演会・シンポジウム・合同相談会 参加 体験談語る  
H26. 10. 12(日) 13:00~15:30 H27. 2. 28(土) 12:30~16:30

・体験者と病院との橋渡し：体験者の要望を伝える場を設定し、体験者に付き添って同席  
H26. 5. 12(月) 13:00~15:00 H26. 9. 29(土) 17:00~19:00

・家族同士の橋渡し：18トリソミーで亡くした方と現在、18トリソミーで療養中の家族の橋渡し

・18トリソミー写真展を金沢で次年度開催するにあたってのサポート

・体験者の話を聞く場：母性看護方法論の講義の1コマの中で自助グループ代表者の方に語っていただく。

**窓 口：** 米田昌代(石川県立看護大学・天使のゆりかご)

自助グループ代表：安田文子(ひまわりの会) 丹保美枝(SIDS 家族の会北陸支部) 村中智恵・泉早苗  
(小さな天使のママの会) 藤田美保 (ハートシェアの会)

**実施内容：**

広報活動：H25年度、福井県の自助グループ「ハートシェアの会」がネットワークに加わったことにより、新たに作成したちらしをH26年度末、関係機関(産科、NICU、小児科、精神科・心療内科、行政等)に配布した。H27年度6月に自助グループのメンバーが中心となって開催する「18トリソミー写真展」の案内も同封した。

お話会の開催：ひまわりの会は3ヶ月に1回(1・4・7・10月の第4日曜日)、小さな天使のママの会は4ヶ月に1回(2・6・10月の第1月曜日)予定通り開催し、その他は1回のみ体験者の希望にて小さな天使のママの会の代表と3人で面談した。

個別相談：体験者からの問い合わせに応じ、適宜自助グループ、相談体制に対する情報提供を行った。

今年は継続的にメール相談を受ける対象はいなかったが、今回初めて病院と連携して、病院の一室をお借り



し、面談実施した。しかし、今後は外来受診時でないで院内での面談は難しいとのことであり、対応方法に課題が残った。1回の面談とその後メールでのやりとりが2~3回あったが、現在落ち着いている様子である。

人工死産(中期中絶)の体験者の方が自助グループのメンバーの中にはおられず、対応しきれなかった例が1例あり、全国の会を紹介した。今後、人工死産の方の対応は課題である。

H25年度に加入した天使がくれた出会いネットワークを活用し、県外に転出する体験者を紹介した。

自殺予防活動：ひまわりの会の代表の方が石川県が主催する活動に参画しており、メンバーが企画に参加した。メンバーの一部は体験談を話した。今後も県と民間団体が協力して実施する自殺予防活動に協力していく予定である。

体験者と病院との橋渡し：今年度、初めて体験者の医療施設に対する思い・要望等を話せる場の設定し、体験者に付き添って同席した。1例目は自助グループ代表者の代弁、2例目は直接体験者と担当医療者と話す場を作り、関係する医師、看護師が複数参加して下さり、親身に聞いてくださった。

・家族同士の橋渡し：保健師さんからの依頼で、18トリソミーで亡くした方と現在、18トリソミーで療養中の家族の橋渡しを実施した。

#### 評価と今後の課題：

広報活動：H25年度作成したちらしについては、配布がH26年度末になってしまったが、ひまわりの会のホームページアドレス変更が年度末にあり、訂正シールで修正してからの配布ができたので、その点はよかったと考える。全国ネットワークに加入し、普段のやりとりはあまりないが、セミナー時の情報交換、転出時の連絡等ができ、連携はとれる体制になっている。今後も活用していく。医療施設では退院時ちらしの配布はしてくださっているようで、相談者はそのちらしを見て連絡してくる場合が多い。よって、ちらしの効果はあると考える。

お話会の開催：今年度は特別相談を含め、年8回の開催となった。SIDS家族の会は昨年度同様、代表の都合で、お話会開催が休止状態になっており、小さな天使のママの会を中心に相談に応じている。ひまわりの会と天使のゆりかごでお話会は定期的開催していくこととし、新規相談者のニーズがあれば今後も不定期に開催したいと考えている。

個別相談・体験者への橋渡し：お話会参加にいたらず、メールでの対応で終わってしまう体験者もいる。お話会参加にいたらずとも、いつでも話しを聞いてもらえる場があるということが重要であると考え。体験者のニーズにそって4つの自助グループが協力して、関わっていくこととする。顔がみえない、一方的なやりとりになりがちであるため、十分注意をはらいながら対応していく。面談を希望した場合の場所の確保については今後検討していく。

体験者と病院との橋渡し：医療者にとってはつらい気持ちになる部分もあるが、建設的に捉え、今後のケアに活かしていけるものであった。また、体験者にとっても医療従事者に伝え、次のケアに活かしていただけるということで、満足感が得られる話し合いになったと考える。今後も必要時つなげていきたいと考えている。

家族同士の橋渡し：亡くされた方と療養中の方の橋渡しということで、難しい面もあるのではないかと危惧していたが、体験者の方は自分が行ったケアを活かしてほしいという気持ちが強い方であったため、うまく関係性が保てた。対象の方の心理面に注意しながら、個別性、ニーズに合わせて今後も考えていければと思う。

全体として、H26年度は体験者と病院をつなげる活動もでき、行政からの依頼もあり、有意義であったと考える。今後ももっと、医療機関・行政に自助グループの活動を知ってもらい、実際に交流をもってもらえるような活動をしていく必要があると考える。

## 2-2-3 祖父母の楽しい上手な孫育て教室

**事業の目的：**現在の子育て事情（育児方法や考え方）の情報を取り入れながら孫育てに関する理解を深める。  
若夫婦のよき援助者として、また祖父母自身が楽しみながら、適切な孫育児ができる。

- 目 標：**
1. 日ごろ、孫育てに関する悩みや疑問を参加者全体で話し合うことにより、参加者同士の交流を図り、気持ちを軽くしたりして経験の共有をはかる。
  2. 他の参加者と話しあいやアドバイスの交換等により多角的な見方を知り、各人が良いと思える方法を考えることができる。
  3. いまどきの孫育て、子育て、若夫婦等に対する付き合い方等の情報の入手をおこなう。

**実施状況：**

**開催日時：**平成26年8月2日（日）13時30分～16時00分

**実施場所：**石川県女性センター 2階 研修室1

**講師：**吉田和枝、米田昌代、曾山小織

**参加者：**地域住民（0-3歳の孫をもつ祖父母）14名 大学院生1名 科目履修生1名

**実施内容：**

話し合いの前にパワーポイントにて、今どきの育児に関する情報、事故や危険防止に関する情報を情報提供した。話し合いにおいては、参加者のプライバシーを守るため事前に準備した（花の名前の）名札をつけてもらい、お互いに花の名前で呼び合うこと、個人情報を出さないように説明し了解しあいを行った。2班に分かれ各参加者の自己紹介に続いて参加者が問題提起した内容（孫との接し方、最近の子育て、嫁との付き合い方等）について話し合った。教員は各参加者の意見を全体の話題となるように進行し、子育て・孫育ての情報を提供し説明も行った。話し合い後、孫の事故や危険防止のためにビデオ上映も行った。最後に本教室に関するアンケート調査（匿名性）を行った。

**評価と今後の課題：**

今年度もアクセス・駐車場の面で女性センターを会場に開催した。研修室の広さやスタッフの人員等から14名を広報いしかわで公募した。応募者は28名で14名をお断りした。男性参加者が3名で、昨年度の1名より増加した。

教室の内容は先にパワーポイントを用いて説明を行い、全般的に情報知ることができた後の話し合いであったため、より有意義な話し合いになったのではないかと考える。

参加者同士の情報交換では、男性は育児を論理的に考える傾向にあった。話し合いはグループ・ダイナミックスが生じ、全体的に楽しい雰囲気の中で気軽に話し合えたため、参加者のニーズに沿っていたと評価する。

アンケート結果では、14名中12名が提出(85.7%)し、教室全体を通して「良かった」「役に立った」「来年度も来たい」と答えた人は10名(83.3%)であった。役に立ったこと・良かったこととして、「若い夫婦と話し合う」「不安に思っている事を聞いて頂き、間違っていないことを確認できた」「実の娘であっても、一線をひいて出来る事と出来ない事をはっきりさせる」「事故に関するビデオ」「孫とのかかわり方や娘夫婦との間でルールをもうけた方がいい事」「他の人の体験話が聞けて良かった」「孫とのかかわり方でそれぞれの意見があり参考になった」等が自由記載欄に挙げられていた。教室の進め方は話し合いを交えた現在の方法に対して全員が支持していた。開催時間の長さについては「ちょうどよい」と9名(75.0%)の人が回答していた。開催曜日の希望は土曜日午後を希望する人が7名(58.3%)と多かったので引き続き土曜日で開催していきたい。

教室への今後の希望として、内容としては「ベビーマッサージ等孫とのふれあいの実践方法、遊び方」「社会環境の変化に応じた育児ポイントについての講義」が挙げられており、方法としては、「話し合いの時間をもう少し短くしても良い」「平等に話を引き出せる様、司会進行の方は気配りをお願いしたい」が挙げられていたので今後、検討していきたいと考える。

## 2-2-4 子育て だろっぷ・イン・さろん

### I 目的

これまで子育て中の母親に対して行ってきた NP (Nobody's Perfect) プログラムの評価や、ニーズ調査の結果より必要性が明らかになった、母親が子どもと離れて一人で過ごす場所を提供すること、これまでの NP グループの枠組みを越えて新たに集まり、テーマを決めて話し合う場をもつこと、の2点を実践するために、今年度も子育てだろっぷ・イン・さろんを実施した。

子育てだろっぷ・イン・さろんでは①「だろっぷ・イン・るーむ」②「NP 親育ち・子育てを考える会」の2つを展開し、育児不安や困難に悩む母親を支援することを目的としている。

### II 開催場所 聞善寺 (金沢市)

### III 実施状況

#### 1 だろっぷ・イン・るーむ

対象者:子育て中の母親

スタッフ:西村真実子、米田昌代、金谷雅代、曾山小織、千原裕香、本部由梨

開催日時と参加人数:

回数	開催日	時間	参加人数
第1回	H26.8.5 (火)	10:00~12:00	4名
第2回	H26.9.2 (火)	10:00~12:00	6名
第3回	H26.10.7 (火)	10:00~12:00	5名
第4回	H26.11.11 (火)	10:00~12:00	5名
第5回	H26.12.2 (火)	10:00~12:00	4名

#### 2 NP 親育ち・子育てを考える会

対象者: NP プログラムに参加経験のある子育て中の母親

ファシリテーター:米田昌代、金谷雅代

記録等:西村真実子、曾山小織、千原裕香、本部由梨、伊達岡五月 (院生)、小西香名映 (院生)

開催日時と参加人数・話し合われたテーマ:

回数	日時	主なテーマ	参加人数
第1回	H26.8.5 (火) 13:00~15:00	自分の気がかりを話そう・みんなの気がかりを聞こう	11名
第2回	H26.9.2 (火) 13:00~15:00	ママ友・他人との関係	12名
第3回	H26.10.7 (火) 13:00~15:00	子どもへのかかわり方 - しつけ、生活習慣の身につけかた -	12名
第4回	H26.11.11 (火) 13:00~15:00	夫・親との関係と接し方	11名
第5回	H26.12.2 (火) 13:00~15:00	きょうだいへのかかわり方	9名

#### IV 評価と今後の課題

##### 1) どろっぷ・イン・る一むの評価

今年度は、広報誌で情報を得た参加者が多かった。

参加者は、他の参加者と和やかに談笑し、交流ができていた。日頃、育児などに忙しい母親が、ゆったりとした時間を持っていた。また、他の子育て経験者から話が聴けることで、自分自身の子育てを見つめなおしている様子が伺えた。

##### 2) NP 親育ち・子育てを考える会の評価

実施前後のアンケートに回答を得られた 9 人について分析した。実施前の、子育ての自己効力感得点が基準値より高いものが多かったが、実施後はさらに得点が高くなっていた。育児困難感 II（子どもへのネガティブな感情・攻撃衝動性）のランクは不変の人が多かったが、育児困難感 I（心配・困惑・母親としての不適格感）のランクは、要支援の段階から正常段階へ好転した者もいた。

##### 3) 今後の課題

「NP 親育ち・子育てを考える会」では、育児困難感得点が実施前後で不変の人が多く、5 回のセッション体験で子どもへのネガティブな感情・攻撃衝動性の改善はあまりみられなかったが、セッション中の参加者の言動をみると、子育ての困った場面における考え方や具体的対応経験を共有すること等を通して、子育ての自己効力感が上昇すると思われた。育児不安や困難に悩む母親にとって、このような場で本音で語り合えることが必要であり、一定の効果があるといえる。

今後は、母親のより一層のエンパワーと育児困難の改善に向けて、ファシリテーションの充実を目指す。

## 2-2-5 おやこのたのしいじかん

### 1. 事業の目的

本事業は、乳がんに罹患した母親が子どもと一緒に絵本を作成し、楽しい時間を過ごすことによって、日ごろは話せない母親の気持ちや子どもの気持ちを伝え合い、親子の絆を深め、今まで以上に大切な時間を過ごすことができるよう、支援することを目的としている。また、母親の病気に対する不安や子どもや周囲との関わりにおける悩みを共有できる場としての機能を果たせるよう、母親同士の対話タイムとして交流の時間を設けている。

### 2. 実施状況

- ・昨年度の実施回数は1回、参加者数は母親が3名、子どもが4名（6歳～8歳）であった。（下図参照）カナダBC州公認アート・セラピストを講師に向かえ、アート・セラピー体験を行った。
- ・3/29については、申し込み数が少なく実施できなかった。
- ・担当者：牧野智恵（石川県立看護大学）・川端京子（石川県立看護大学）・山口節枝（乳がん患者会BCSG代表）・松本友梨子（福井済生会病院）・北本福美（金沢医科大学）・朴裕美（音楽療法士）・石川県立看護大学4年生2名

日時	場所	参加者数【母親】	参加者数【子ども】
H26.7.6（日）13：00～15：00	玉川こども図書館	3名	4名
H27.3.29（日）10：00～12：00	福井県立病院	0名	0名

### 3. プログラム内容

時間	内容
10：00～10：10	アンケートの記入
10：10～10：20	音楽でリラックスタイム
10：20～11：10	アート・セラピー
11：10～11：50	母親同士での対話タイム
	子どもは「アート」で遊ぶ*母親同士の話し合い中に別室で行う
11：50～12：00	アンケートの記入

### 4. 評価と今後の課題

今年度はアートを用いた親子の交流ができるように企画した。はじめは緊張感がある子どもたちも粘土や絵を書くことを通して笑顔が見られ、リラックスした雰囲気になっていった。母親同士の対話タイムには、子どもたちで折り紙や工作することに夢中になっており、母親がいないのを気にかける子どもはいなかった。また、母親同士が交流することで、「少し前向きに、時には家事を手抜きしてもいいと思え、心が落ち着いた」とのアンケート記述があったことから、日頃抱えている思いを表出できる場となっているのではないかと考えられる。次年度は、このような場を継続して提供することで、同じ方々に参加していただくことを想定し、継続した交流に発展できるような運営を検討している。今年度参加者が集まらず企画を実施できないことがあったため、次年度は年間スケジュールを決めたうえで、広報活動に力を入れていく必要がある。

## 2-3 ワンストップサービス

### 1. 事業の目的：

本事業の目的は、石川県内の市町村、企業、NPOなどの、市民を対象とした地域貢献事業についての相談を受け付け、運営が円滑に行われるよう支援することである。また、石川県立看護大学が立地する地元かほく市の企業をはじめ、石川県内における看護・福祉・介護等の領域におけるさまざまな製品や用具の開発など、本学専任教員との共同研究について相談窓口を一本化し相談体制を整えることである。

### 2. 平成26年度の事業の実績について：

相談先	相談内容	対応
NPO法人クラブパレット	引きこもりがちな高齢者の健康づくり、高齢者同士の仲間づくり	小林 宏光教授、中道 淳子講師 「笑いヨガ」の介護予防事業への導入に関する調査研究を行っている2人の先生が助言を行った。
株式会社PFU	ヨガ、チョイトレ教室参加者の効果測定	長谷川 昇教授 就業後に実施したヨガ、チョイトレ教室の参加者に対して、体組成測定を行った。
宝達志水町商工会	平成27年度の合併10周年桜まつり in 宝達志水の企画	長谷川 昇教授、川村 みどり講師 健康測定、本学茶道部と県立宝達高校茶道部と協働した野点、学生によるビンゴ大会の司会などを提案した。

### 3. 今後の課題：

教員、学生が行った地域貢献活動、教員の研究活動などの連携・交流状況について、ホームページを利用して迅速に学外へ情報提供していくことにより、地域の課題解決機能を強化していく必要がある。

### **3 国際貢献事業**

## 3-1 平成26年度パラグアイ・ブラジル日系研修報告

### 「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」

この研修事業は独立行政法人国際協力機構（JICA）の委託を受け、石川県立看護大学と羽咋市社会福祉協議会が実施運営する。中南米日系社会支援の一環として平成19年度から開始された。

#### 1) 研修目的

高齢者の尊厳を支え、それぞれの地域で健康で自立した日常生活を支援するとともに、介護に必要な高齢者へのケアの知識と技術の実際を学び、その機能でシステム化する方法論を習得する。

#### 2) 研修実施体制

(1) 研修期間：2014年7月15日～8月8日

(2) 研修員数：3名

(3) 研修場所：石川県立看護大学、羽咋市社会福祉協議会

(4) 講師 石垣和子 川島和代 長谷川昇 彦聖美 塚田久恵 織田初江 阿部智恵子 中道淳子  
木森佳子 森田聖子 子吉知恵美 中嶋知世 井上智可（石川県立看護大学）  
岩城和男 毛利浩 松浦朝子 宮下陽江 山口玉枝  
柳沢昌代 高田外喜美 中元美幸（羽咋社会福祉協議会）

#### 3) 研修内容

高齢者福祉制度や日本の伝統的な文化、ケアシステム、介護の知識や技術を大学にて講義・実技を学びつつ、地域の病院、施設、デイサービスなどの多様な機関における実習を行う。また、研修で得た知識等の活用方法について検討し、レポートにまとめて発表する。

#### 4) 研修目標・評価指標

目標・評価指標・成果（行動レベルのアウトプット）を明確化し、評価をしやすいするために、報告書評価指標フォーマットに基づき評価した。目標ごとに評価指標に伴うアウトプットも具体的に記載し、アウトプットは、最終のアクションプランに繋がるように、「自国の現状把握」「自国と日本の対比」をふまえて、常に自国と関連付けてまとめるように構成した。目標は、以下の通りである。

目標1. 自国の高齢者ケアの課題を明らかにする。

目標2. 地域で暮らす高齢者が生活機能を維持・向上するための支援について学ぶ。

目標3. 介護が必要となった高齢者を支援するために、身体的特徴・疾患の理解と介護の知識と技術を学ぶ。

目標4. 地域における介護予防と在宅ケアシステムについて学ぶ。

目標5. 自国・自地域における実践可能なアクションプランの作成・発表ができる。



## 5) 評価

昨年度の研修と同様に約1ヶ月間にわたり、介護の実務者研修(旧ヘルパー3級)程度の介護技術を取り入れた研修内容であったが、これまでの研修の中で最も短い研修期間であった。そのため、カントリーレポート作成などに十分な時間がかけられず、研修員のニーズをどこまで適切に把握できたかは疑問が残る。しかし、研修員の自国での立場について話を伺いながら理解するように努め、その立場における研修ニーズを想像しながら、質疑応答を繰り返し、的確に把握するように努めた。

今年度は講義と演習を集中的に前半でおこない、後半は羽咋での演習をまとめて実施した。講義演習は事前に準備した内容に加え、研修員からの質疑に答えながらの展開で行うことで、ニーズに応えることに努めた。羽咋では足立氏が自国で日系の高齢者施設で勤務していることをうけて、昨年度からプログラムしていない特別養護老人ホーム「眉丈園」の施設見学と眉丈会の取り組み(おむつゼロの取り組み NHK放送)DVD視聴を7月18日「羽咋市の概要と市内の状況について」に組み込み、研修員のニーズや状況に考慮したプログラムが臨機応変に組まれた。

パラグアイで作成された高齢者介護テキスト「お世話のてびき」をJICAから提供していただいたことから、その冊子を使って解説することもできた。現地のテキストであるため、帰国後も大いに使用していくことで、学んだことを普及させていきやすいと思われる。

研修員同士のチームワークが大変良かったことから、研修後も互いに連絡を取り合いながら、活動を行うときにも助け合っていけたらよい。また、これまでの研修生が集まって活動していることが、今回現地の便り「JICA 本邦高齢者福祉研修生の会便り」から知ることができた。このような会に加わっていくと継続した活動になると思われる。

## 4 そ の 他

## 4 その他

### 4-1 平成26年度かほく市との包括的連携協定にかかわる本学の取り組みについて

地域ケア総合センター センター長 長谷川 昇

#### 1. 平成26年度の取り組みについて：

平成22年10月に石川県立看護大学とかほく市が包括的連携協定を締結し、本格的な活動を開始して4年目を迎えた。

本年度は本学が幹事となり、2回の協議会が開催された。

5月20日（火）第1回協議会：昨年度の事業報告と本年度の事業について

10月23日（木）第2回協議会：本年度事業の中間報告と、来年度事業の計画立案について

（第2回協議会は、来年度事業をスムーズに遂行するため、来年度事業計画に伴う予算計上時期に合わせて開催した。）

連携した提案事業は少しずつ整理・再編され、今年度はかほく市から継続7事業、新規1事業、石川県立看護大学より継続3事業が実施された。

	かほく市主催事業	看護大担当	看護大主催事業
1	ケーブルテレビ事業（企画情報課）	垣花准教授	
2	認知症にやさしいまちづくりシンポジウム（介護予防課）	川島教授	
3	介護予防講座の効果的な展開（介護予防課）	塚田准教授 彦准教授	
4	道の駅活性化（産業振興課）	垣花准教授	
5	かほく市民体力テスト（生涯学習課）	垣花准教授	
6	問題を抱える子供等の自立支援事業（学校教育課）	武山教授 西村教授	
7	教育相談事業（学校教育課）	武山教授	
8	#高齢者にやさしいまちづくり座談会（介護予防課）	川島教授	
9		地域看護学	高齢者と看護学生との交流事業（地域看護方法論Ⅰ）
10		老年看護学	高齢者と看護学生との交流事業（老年看護学概論）
11		老年看護学	看護学生によるフィジカルアセスメント（老年看護方法論Ⅱ）

#は新規事業

ケーブルテレビ事業では、垣花ゼミが実施した「健康カフェ」について密着取材を受けた。計 2 回の取材の結果、3 月 8 日（土）に放送された。

認知症にやさしいまちづくりシンポジウム事業では、川島教授がコーディネータとして参加した。

介護予防講座の効果的な展開事業では、男性介護者の集いで彦准教授が講師を勤め、塚田准教授が本学学生と高齢者の交流事業を実施した。川島教授が、高齢者の生活機能評価に関する基本チェックリスト中の認知機能の項目に関連する因子を分析し、助言および指導を行った。

かほく市民体力テスト事業では、長谷川教授、垣花准教授、大西助手、本学学生 4 名が企画・運営に協力し、参加者 88 名の測定を行った。

問題を抱える子供等の自立支援事業では、不登校問題対応運営協議会、問題を抱える子供の事例研究会開催に際し、武山教授が助言および指導を行った。相談室登校の生徒や教育支援センターでの不登校児童・生徒の学級復帰支援として、本学学生が市内各中学校およびスマイル教室に学習支援ボランティアとして関わった（6 名、66 回）。

教育相談事業では、いじめや不登校など学校での問題行動や家庭で悩みを持つ子供、保護者、教職員に対して、武山教授が教育相談を実施した。

道の駅活性化事業は、来年度の実施に向けて計画中である。

その他、かほく市内への学生居住促進のための「かほく市学生居住助成金制度」がある。かほく市に住民登録している学生 1 人あたり、年額 60,000 円の助成を頂いている。

以上の事業の他に、かほく市民大学校（平成 26 年 5 月 28 日（水）19：30-21：00）、『生活習慣を見直し健康に暮らそう！』への講師派遣（長谷川教授）を行った。また、防災訓練（平成 26 年 10 月 12 日（日））では、「災害看護論」（4 年生）の授業の一環として、林教授、井上助手と受講生 44 名が参加した。具体的には、「トリアージ訓練における模擬患者・家族役」「応急処置訓練の住民へのインストラクター補助」「災害ボランティアセンターでの職員の補助」を実施した。

## 2. かほく市との包括的連携協定における事業展開の課題と方向性：

平成 26 年後期から、ボランティア活動を単位として認定する「ヒューマンヘルスケア」科目が新設された。「フィールド実習」の課題解決型授業から「ヒューマンヘルスケア」、ボランティア活動、卒業研究へ展開させるなど、これらの活動を通して学生が地域で活動する範囲が広がり、学生の主体的な活動が惹起されることが期待される。ただし、学生の活動が、単なるボランティア活動に終始するのではなく、各事業の企画・運営にも関わり、学生の課題解決能力と教育の質の向上に繋がることが望まれる。

## 2. 平成 27 年度に向けて新規事業の実施についての検討：

平成 27 年度新規事業として、かほく市より「市民体力測定結果の集積事業（健康福祉課・保険医療課・生涯学習課・介護予防課）—長谷川教授、垣花准教授」、看護大学から「子育てしやすいまちづくり（仮題）」と「50 代をターゲットにした健康教育の効果に関する研究—インセンティブの付与に着目して（健康福祉課）—垣花教授」が提案された。

さらに、「子育てしやすい街づくり」について、フォーラム開催に留まらず「大学からかほく市に積極的に働きかけ、協働で課題解決を目指すようなプログラムも考えていきたい。

## 4-2 石川県立看護大学公開フォーラム

高齢化の波が予想以上のスピードで押し寄せる現代において、定年退職後にどのような生活をするのかが大きな課題となっている。「家族に迷惑をかけずに一生を過ごしたい」「楽しい老後でありたい」と多くの人が願っている。

本フォーラムは、高齢者が定年後の20年間を寝たきりになることなく生き生きと生活するためにはどのようなことを心がければよいのかを考える機会とすることを目的としている。

アクティブシニア専門家向け講演会「長寿社会における医療関係者への期待」を3月17日(火)17:30よりANAクラウンプラザホテル2階多目的ルーム・セラヴィにて開催した。参加者は26名であった。

アクティブシニア講演会「長寿社会に生きる」を3月18日(水)10:00より石川県立看護大学大講義室にて開催した。平日午前中にもかかわらず参加者は約230名と立ち見の出る状況であった。

講師は東京大学高齢社会総合研究機構の特任教授・秋山浩子先生にお願いした。秋山先生はジェロントロジー(老年学)がご専門で、高齢者の心身の健康や経済、人間関係の加齢に伴う変化を20年にわたる全国高齢者調査で追跡研究されている。また近年は超高齢社会のニーズに対応するまちづくりにも取り組むなど超高齢社会におけるよりよい生のあり方を追求されている。

講演では長年にわたる多くの研究成果に基づいて、超高齢社会の課題として人生90年の設計と社会のインフラの作り直しが必要であることを提案された。長寿社会のまちづくりとして千葉県柏市における社会実験についてお話していただいた。キャリアをいかした「セカンドライフの新しい働き方」、住み慣れた所で安心して自分らしく年をとるための「循環型住宅」といった目から鱗のようなお話を分かりやすくご紹介していただいた。

講演後のアンケートには「勇気をいただきました」「明るい希望が湧いてきました」「この講演を聴いて前を向いて行かなくっちゃと思いました」などという声が寄せられました。帰路につかれる参加された方々の表情がとても明るいのが印象的でした。

地域ケア総合センター地域貢献担当としては、多くの住民の「豊かな老後を過ごしたい」というニーズにそった企画を今後も様々な視点から検討していきたいと考えている。

石川県立看護大学 公開フォーラム2014  
アクティブシニア講演会  
**長寿社会に生きる**

講師: 秋山 弘子先生  
(東京大学高齢社会総合研究機構 特任教授)

プロフィール  
高齢者の心身の健康や経済、人間関係の加齢に伴う変化を20年にわたる全国高齢者調査で追跡研究。近年は超高齢社会のニーズに対応するまちづくりにも取り組む超高齢社会におけるよりよい生のあり方を追求している。

日程 2015年3月18日(水)  
時間 10:00~11:30  
会場 石川県立看護大学 大講義室  
(かほく市学園台1-1)

入場 無料

講演内容 「家族に迷惑をかけずに一生を過ごしたい」「楽しい老後でありたい」高齢者が生き生きと生活するために心がけることについて

お申し込み・お問い合わせ

- ◆石川県立看護大学 地域ケア総合センター事務局  
TEL: 076-281-8308  
FAX: 076-281-8309  
E-mail: sagocen@shikawa-nu.ac.jp
- ◆かほく市役所 介護予防課 介護予防係  
TEL: 076-283-7130 FAX: 076-283-3761  
E-mail: kago@city.kahoku.shikawa.jp
- ◆宝達志水町 健康福祉課 地域包括支援センター  
TEL: 0767-28-8110 FAX: 0767-28-5569

主催: 石川県立大学法人 石川県立看護大学 共催: かほく市 宝達志水町





石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

## 事業報告書（第12巻）

平成27年11月発行

発行：石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

〒929-1210

石川県かほく市学園台1丁目1番地

Tel.076-281-8308 Fax.076-281-8309

© 2015 Ishikawa Prefectural Nursing University.  
All rights reserved.

著作権は石川県公立大学法人に帰属する。